素朴な笑顔や人がらに魅せられて！

ヒマラヤの秀峰マナスル！ 28日間のトレッキング

綾部 一好さん（毛呂山台）

綾部一好さん(72)は、19歳から登山を始めて、今年で54年目になる。数学の教師をする傍ら、今までに登った山は、北海道から沖縄まで550か所を超える。定年後は、夢にまで描いていたヒマラヤに4回ほど足を運んだ。4回目は、2008年10月から11月の秀峰マナスル。28日間、16人のスタッフが、綾部さんのために行動し、水平距離で210キロメートルを踏破した。

綾部一好さん

山に登るために

綾部さんの日常生活は、山に登るためにある。毎日一万歩の散歩は欠かさない。また、越生町や日高市、遠いところでは東京都福生市などまで歩いていく。高い山に登ることが決まれば、秩父の武甲山や群馬県の武尊岳など2000メートル級の山々を登ってトレーニングする。毎年、このような生活を送ってきた。

呼吸器の疾患にかかったときも、どうしても山に登りたい。その思いから、呼吸器の機能を高めるために尺八を習った。尺八は、師範の免許をもらうまでになった。上達に伴って山に登る体力もついてきたという。

高地に住む人びとに魅せられて

頂上に立つことを目的とした登山に対して、頂上にこだわらず、山の中を歩くトレッキングが綾部さんのスタイルだ。綾部さんは、「6000メートル級の山々に囲まれていると、どの山が高いという感覚は消えてしまいます。ベースキャンプの高さに身をおくだけで十分なのです」と語る。

また、ヒマラヤ山脈を擁するネパールの魅力について、「3000メートルを超える高地に住む人びとの素朴な笑顔や人がらに魅了されてしまったからなのです」と話してくれた。

綾部さんは、ネパールの人びとと触れ合うために、2年も前から英語やネパール語、ヒマラヤの地形を勉強した。そして現地では、カタコトのネパール語を駆使して、ポーターやキッチンスタッフ、ネパールの子どもたちと会話を楽しんだ。

算数の授業

綾部さんは、ヒマラヤで算数の授業を行う機会があった。「ある学校の校長が私が教員だったことを知っていて、ぜひ授業をやって欲しいというのです。私は、黒板に書いてあった数字を使って算数の授業をしました。そのあと、逆に私が生徒になりました。私の覚えている数字の読み方、発音を子どもたちに直してもらうのです。子どもたちは大喜びで、楽しそうに、そして真剣に「そうじゃない、こうだよ…」と身を乗り出して教えてくれるんです」。そう語る綾部さんの笑顔はとても輝いていた。

『誠実さ』の意味を知る

綾部さんは、今回のトレッキングで感じた、『誠実さ』について語ってくれた。

「トレッキングの最終地点まで来ると、それぞれのスタッフは荷造りをして自分の村に戻る準備を始めます。通常ならば、この時点で契約は終りますが、私が乗るヘリコプターが到着しないことがわかると、キッチンスタッフが、まとめた荷物をわざわざほどいて私のために3日間も食事を作ってくれました。ネパールの人びとは、ありがとうの言葉さえ求めずに、ひたすらその人のために尽くすのです。私は、このときに、『誠実さ』という言葉の意味を肌で感じることができました」。そう語る綾部さん。損得では語れない人びとの温かさを感じるエピソードだ。

綾部さんは、今でも奥さんと一緒に、日本の山に登っている。「山には、言葉では言い表せない魅力があるんです」。そう語る綾部さんの山登りは、これからも続いていくことだろう。

ネパールの子どもたち

始まっています　地域内交流！

区長と民生委員のつながりから始まる地域の絆！

第二団地　ふれあいサロン

「第二団地ふれあいサロン」は、区長と民生委員が役員となり運営している。サロンでは、年2回の食事会のほかに町内会で行われる春のレクリエーション大会、夏祭りなどにも積極的に参加をしている。

今年の春のレクリエーション大会は、子ども育成会と連携してグラウンドゴルフ大会を行った。この大会は毎年趣向を凝らしており、いきいきサロンの参加者も毎年楽しみにしている行事の一つだ。「高齢者と若い人との交流会をするとお互い顔を覚え、街中であったときに挨拶するなど、人の輪が広がっていくんですよ」と役員の秋山さんは語る。

もともと第二団地のふれあいサロンは団地内の一つの地区で行われたのが始まりで、平成15年から第二団地全体で行われるようになった。「団地全体で事業を行うにあたって、第二団地では、まず区長と民生委員が連携を図ることで町内会の活性化を図りました」と大野町内会長は語る。

事業の内容は、区長と民生委員が共同で意見を交換しながら考える。事業は、世代間の垣根を越えたものを考案するなど、時代に即した事業を考えるようにしている。「参加してよかったよ。楽しかったよといわれると喜びを感じます」と役員の森沢さんは話してくれた。参加者が楽しんだうえで、地域内での交流が頻繁に行われるようになることが、サロンの狙いの一つである。

第二団地では、これからも区長と民生委員が意見を交換しながらサロンの運営を進めていきたいと考えている。役員の大木さんは「これからは参加者の裾野をもっと広げて、更に地域内の交流を盛んにしていきたいです」と語る。そして役員全員の気持ちを踏まえたように大野町内会長が、今後の目標を語ってくれた。「住んでよかったと自慢される地域にしていきたいですね」と。

春のレクリエーション大会の様子

毛呂山歴史散歩

文化財シリーズ198
毛呂山の昔話 3
～狐の伝承～

毛呂山にも以前は狐が多くいたようです。狐は人を騙すことで知られており、狐に化かされた、狐火を見たという伝承は毛呂山でも数多く残されています。今回は、町内の狐にまつわる伝承をご紹介します。

狐の嫁入り

①昭和7年6月ごろの話です。そのころは養蚕が収入源で、夕方、父親とともに河原で蚕の桑を切っていると赤くて丸い火の玉がポイポイと動いて消えていくのが見えた。私が「狐の嫁入りだ」と家族に言うとみんなが外へ出てきてこの火の玉を見た。火の玉は4～5分ぐらいはポイポイと動いていて、後から消えていった。その後、桑きりをこの河原付近でするのが怖くて仕方がなかったが父親は平気な顔をしていた。（箕和田）

狐に化かされた話

①お松ちゃんが夜分に大類の北はずれ、庚申様のある大きな松の木の近くを通ると人間ぐらい大きな白い狐が横切った。すると、自転車をどこに置いたのかもわからなくなり、道に迷った。家に戻ったときは傷だらけだった。（川角）

②大正半ばごろの話。仕事を終えた男が一杯飲んで、夜遅く前久保の自宅に帰る途中、臥龍山のふもとで狐に出会った。男は山の中に連れ込まれ、一晩中歩かされたという。我に返った時はすでに東の空が白んでいた。手に持っていた魚の干物はなくなっており、驚いた男は2～3日寝込んでしまったという。（前久保）

狐に化かされた話には、山林を歩いていて急に気分が悪くなり、どこを歩いているのかわからなくなる、同じところをぐるぐる回るという点などが毛呂山では共通して見られ、迷うはずのない道に迷った現象を狐の仕業としていた面もあります。

狐火は別名「オトウカ」とも呼ばれ、大類と川角境にある山はオトウカヤマともいわれています。それだけ狐が多く住んでいたらしく、オトウカヤマでは近年でも狐の巣穴を見たという話も聞きます。狐に化かされないよう、昔の言い伝え通り、眉毛に唾をつけて山に入るといいかもしれません。

出典『毛呂山民俗誌1』
毛呂山町教育委員会